

カツカツ研ニュースレター No.6

発行 = カツオ・かつお節研究会 (カツカツ研) 発行日 = 2001 年 10 月 24 日
 連絡先 = 064-0953 北海道札幌市中央区宮の森 3 条 6 丁目 8-8-402 宮内泰介 tel&fax: 011-706-4150
 miyauchi@reg.let.hokudai.ac.jp
 ホームページ = <http://reg.let.hokudai.ac.jp/miyauchi/katsuo.html>

特集 沖縄 人びととカツオ・かつお節

本号は、沖縄特集を組みました。沖縄は、戦前、南洋（ミクロネシア＝南洋群島、ボルネオ、インドネシア＝蘭領東インド）へ多数のかつお節移民を送り出しています。本号は、その中でもとくに多くの移民を送り出し、そして今でもカツオをとりつづけている池間島、伊良部島、そして沖縄本島の本部町をとりあげます。くしくも今年は、1901年に沖縄で本土式のカツオ漁が始まってちょうど100年にあたります。

Contents:

親方のまなざし	海・人・カツオ	見目佳寿子	2
小禄治世さんとかつお節	沖縄県池間島民の南洋移民体験	宮内泰介	6
よしこオバアとコーヒー	缶詰女工として北ボルネオに渡った女性のライフヒストリー	高橋そよ	10
カツオの町本部と南洋移民		藤林泰・高橋そよ	14
戦前沖縄かつお節移民関連年表			18

今回は、沖縄特集ということで私の大好きな池間島いけまの話を書きたい。しかし、そのうち何の話を書くのか大いに迷うところなのである。オジイ達が、冗談とも本気ともつかない口調で「カツオを釣りきらん人は池間民族じゃないよ」というくらい、誰もが何らかの形でカツオに関係した生活を送ってきているからである。その中でも、最も私の敬愛する方がいる。吉進丸船主の伊良波進さんいらはすすむである。去年、古希を迎えられた伊良波さんは、船長として夏になるとカツオ一本釣漁業を行い、冬になると深海一本釣りをしてほぼ一年中、島の近海で魚を追っかけている。本土の同じ年の人と比べると、肉体的・精神的に格段に若い。おまけに、非常に魅力のある人である。わたしの妹も、初めて会った時から一遍にファンになってしまった。

伊良波さんの事を書くに当たって、親しみをこめていつものように、「親方」と呼ばせていただきたい。親方は、カツオ一本釣り名人というれっきとした肩書も持っている。島はカツオ一本釣り名人を多く輩出しているのである。それでは、如何に池間島の生活がカツオと共にあるのか、その特性と漁業小史を述べてみたい。

1. 海のシマ

宮古は部落ごとの文化的均質性、他部落との文化的異質性を保持している。均質な自然環境の中でも、池間人の海への感性は緻密でありかつダイナミックである。

漁業に重要なさんご礁のリーフの名前が海に面したどこの部落でも方言によって命名されて

いるのだが、「近隣の部落は、池間の名前を使っている」というように池間の人達は彼らの海との関わりに誇りを持っている。

2. 池間島のカツオ漁業小史

沖縄県人による近代のカツオ漁業は明治 34 年（1901）に座間味村ざまみで始まり、県下に瞬く間に広まった。宮古島民を苦しめた人頭税制が廃止されたのが翌年。産業などほとんどなかった頃である。池間島にも、他と同じく上布や粟を課せられたが、土地の乏しさゆえウヤイン（貝などの海産物の上納）で補っていた。「宮古八重山郡漁業調査書」（抄）によると、平良ひららにおいて、漁業を専業としているのは、池間島のみであり、彼らは素潜り漁業を得意とした。約 20 尋（36m）の海底にも潜水し、高瀬貝やシャコ貝などを採集する。魚を捕獲するのは、子供や年寄りのやるものといわれていた。カツオ漁業が盛んになると、夏にはカツオ漁業に従事し、冬になるとすべて貝の採集に従事した。水中眼鏡が明治 21 年頃、糸満から購入されるまでは、山羊、豚や鱈の油を、水面にたらし底を覗いてそのまま潜っていた。

カツオは池間島の人達にとって「神の使い」であった。カツオの群れの中に船が入ると、不思議と波が静まったので沖で群れに遭遇すると、手を合わせて拝んだという。明治 39 年鹿児島出身の鮫島幸兵衛が、島の周りでカツオ漁業を始めたとき、当時の島人達の驚きを伝えるエピソードがある。

明治初期、奄美大島に流刑となった池間の男

がいた。3年の刑期を終えた帰途、船が難破して鹿児島県の山川に漂着した。そこでは、カツオを刺身にしたり乾燥したりして食べている。男は、ヤマトは恐ろしいと思った。そこで半年過ごしたが、帰途船が再び難破した。長崎に漂着したので、男は縦横に走る汽車や蒸気船をはじめて見た。2年半後、無事に池間に戻り、皆にこう語った。「ヤマトでは、カツオをナマス(刺身)にして食べている。」

島の人達は、「監獄フリムヌ(馬鹿者)」として取り合わなかった。「長崎では、額に灯をともした車が走っている」といえば、更に狂人扱いされた。実際に明治26年、宮古に商船が就航し、明治39年にカツオ漁業が始まるまでは、島の人々にとっては、信じがたい話だったのである。そして、それまでのほら吹きオジイは、一転して若者の尊敬の的になったのだそうだ¹⁾。

平良で雑貨店を営んでいた鮫島は、宮崎県よりカツオ漁船を2隻借り受けた。帆船のカツオ漁船は6丁櫓6丁櫓式で、帆を一枚装備しているので、一枚船とも呼ばれた。明治40年になると、帆が2枚の8丁櫓8丁櫓式の大型船も現れた。潜水の得意な池間人(沖縄島方言でイキマー)を活餌採取係に雇用したのである。当時は、長さ8尋の1本マストの帆船で八丁櫓、餌は生簀でなく桶に入れ柄杓で水を汲み替えるという非能率的な船で、散水器もなく、竹製の水掻きを付けた竹竿を左手に持ち、釣りながら各自が水をかけていた。池間島を基地に狩俣(池間島の対岸にある宮古島の集落)において鰹節の製造が行なわれた。創業と同時に宮崎、鹿児島県の職人が来て茅葺の工場に製造にあたった。

明治43年(1910)池間島漁民は「組合」を作り、6隻の漁船でカツオ漁業を行い、本土派遣の教師が指導する下で、鰹節製造を始めた。鮫島は、これをもって同漁業から撤退した。

池間のカツオ船の動力化は、本土のカツオ船動力化に8年遅れた、明治44年である。これを

きっかけに焼玉エンジン付き漁船が増加する。散水器は、大正7,8年頃に使用され始めた。好漁場に恵まれて、漁労技術の開発に奮闘したために大正9~11年には、3年連続沖縄県第一の水揚げ高を達成した。第一次大戦後の好景気で鰹節は作れば作るだけ、売れた。人々は家を新築し、生活は急に贅沢になった。料亭のビールで足を洗った逸話が生まれたのはこの頃である。「カツオの島、池間」の名が全琉球に轟いた。その後、南太平洋のミクロネシア地方に出漁してカツオを釣るようになった。戦時体制の強化とともに、工場の職人も徴兵された。

親方によれば、昭和30年頃には、池間島には25~35トンで40名乗れる漁船が14隻あり、夏にはカツオ漁業で島は活気づいた。昭和35年には、宝石サンゴの漁場が見つかり、全カツオ船がサンゴ採取に力をいれた。翌年から、現在のディーゼルエンジンになり、昭和45年くらいまでカツオの豊漁が続いた。45年には、第2次南方カツオ漁業が始まり、池間島から約70名の漁師がカツオ漁業に従事して年間5億円以上の収益をあげた。島の近海では昭和57年頃から回遊魚群が少なくなり、現在、カツオ漁船も3隻と寂しい限りである。

3. 漁業組織の構造

島のカツオ漁業が始まった明治41年から、組合制度と呼ばれる漁民の共同経営が行なわれた。これは、部落民全体が「カツオ組」に属する資格を持ち、1世帯に1人出ることが決まりであった。主に戸主が参加し、資格は現実に家を1軒持つこととされた。組合単位で漁労から鰹節加工までを営む。若者はカツオを釣り、老人や体の不自由な者は陸で鰹節を作って働いた。中学を卒業すると、何年か潜水追い込み漁をして鍛えられてから、カツオ船に乗ったのである。少年の夢は早く一人前のカツオ漁師になること

であった。「昨日はどここの組が、いちばんたくさんカツオを釣ったか」、「どここの組に入るのか」などということは、子供達の日常会話に登場し、島人の社会・階層・政治・宗教に大きな影響を与えた。

ハーリー競技でも、組対抗で船を漕いだ。しかし、昭和初期の不況の折に、組合は次々に解散し、次第に組合制度は崩壊していく。

昭和7年から「親方制度」になった。親方制度では、組合費を差し引いた純益を大体4対6に分け、4を船主がとり、6を乗組員が取って協同分配するというシステムになった。現在でも、組合員という呼び名が残っているのは、昔の組合制度の名残である。

親方は、船の持ち主で船に乗らないのが普通であった。だから、今の伊良波親方のように、船にも乗って漁労をいつも見ているのは珍しいようである。

4. カツオとインシャ

沖縄本島の方言では、漁民は「海人（うみんちゅ）」というが、宮古島では海者という言葉からであろう「インジャー」といい、池間島では、「インシャ」という。私は、インシャの親方にカツオの事や海の事を教わろうとしていた。大学院生になった夏、初めて池間島にホームステイさせていただき、やさしいおばあに連れられてカツオ船の船長に挨拶しに行った。

内地の女の子がカツオ船に乗るなんて、おばあにとっても初めての体験だったので、二人とも緊張していた。朝、5時におばあが寝ている私を起こして港の吉進丸の前に連れて行き、乗組員らしきおじいに話かけて了解を取ろうとした。しかし、彼らは親方に聞け、としか言わなかった。

親方が来るのをひたすら待つ。親方は、自転車で見えた。初対面でなく、既に乗船の了解を

取り付けてあったが、やはり挨拶をしっかりとしなければならぬ。緊張したが、「とにかくよろしく願います」と泡盛の二合瓶を渡すと、硬い表情のまま受け取られた。

船長は操舵席で舵を取る。そこが一番

高い視点から海を見渡す事ができる。双眼鏡を持つ係のおじいさんもそこにいる。私は船長の左前方の気持ちのよい場所にいる事を許された。そこは、太陽も適当に遮られ、視界も良好なので、観察には絶好のポイントなのである。船が池間島を出発して池間大橋の下をくぐり、八重^{やえ}干瀬^{ひし}に向かっていくまで、私はずっと興奮しながら回りを見渡していた。港から出るとき、船長は私の渡したお酒を海に注いでいた。船長が私の事をどのように受け入れてくれるのか、まだわからない。硬くつむんだ口元に、こちらの表情も硬くなる。何を祈ったのだろうか。私が乗る事をきちんと神様に告げ、大漁と安全をお願いしたようである。親方は、信仰の厚い人なのだとわかった。島の西側に鎮座する人々の信仰厚い大主神社（ナナムイ・ウタキ又はウハルズ）の方向に向かって手を合わせた。カメラのシャッターを遠慮しつつ、切る。カメラを人に直接向けるのは抵抗があったが、これは仕事であるから仕方のない事である。それに、私が写真を撮るのは、もとよりお見通しなのでいい写真を撮らなければならない。

朝日が昇り、海が朝焼けに包まれていく。すばらしい光景に感動した。親方や、親方と契約する漁師達は、毎日このようなすばらしい大自然のドラマに会っているのである。年を経た老人達は寡黙なのか何も言わないけれど、皆心の



舵を取る伊良波進さん

中では池間から見る朝日は、世界一だと思っている。カツオがたくさんいるかどうか、やはり気になる場所であろう。このような時、質問さえ無粋である。感想などを聞いてみたかったが、ポーッと感動していた。今日一日だけの付き合いではなく、今後長くお付き合いをしていきたいので、はやるまい。

インシャとの出会いの場面を長々と書いてきたが、私が、泡盛の瓶を持参したという事が、とてもよかったのだそうだ。本来、酒を持って行くなら縁起を担いで2本が良いそうなのであるが、島に入るなら島の慣習を大切にしようとする私の思いが理解されたのであろう。

私は、親方とこのように出会い、夏の海の上で私は彼の言葉に心を傾けた。

親方は、知識を性急に聞きたがる私を牽制して、ゆっくり、やさしく海や自然について物語る。わたしは、孫のようにおじいの語りをせがむのである。

「僕の職場は海だからね。海の事ならば、よく知っているよ。海はね、広くてね。大きいんだよ。歌にもあるさ、知っているでしょう」

親方は今、海に潜る事はないけれど、海のなかの生物の営みを掌を指すがごとくにわかっている。海の上でも、季節を知る。

「海の上にとんぼがよく飛ぶんだよ。台風の時になると、たくさんとんぼが飛んでくるから、カディフカスアウスンと呼んでいるよ」

「サンゴの生命力はとても強い。若いサンゴの出す粘液でサザエが孵化しない、小魚もいない。台風で壊されても翌年には元に戻っている。大きいサンゴ礁には魚が豊富。人間がサンゴを保護するのではなく守られている。本土の先生方は、海を守れというでしょう。海を守るわけではないさ、人間の力なんて小さいもんだのに。海にやさしいのは、沖縄の漁師が一番さ。カツ

オと知恵比べしながら一本釣り釣るのではカツオは減らん。本土の漁師は、巻き網を使って根こそぎカツオを獲るでしょう。あれが一番いけないよ。わかるでしょう」

「都会の人間は、大きい事を考えるけど、池間の人は、小さい仕事でも一生懸命するよ。小さい仕事をしっかりやっておれば、経験から人生を語る事ができるんだよ。都会の人よりも、池間の人は、生きがいのある人間だよ」

親方は、幼少時、お祖母さんの語った言葉の中に忘れられない言葉があるという。

「立派なインシャ（海人）になるなら『ヤビジをタカサ（八重干瀬を崇拜）』しなさい。昔から池間島の漁師達はヤビジで漁を営んで生活してきたんだよ。『ヤビジンカイ（八重干瀬の方に）』足向けて寝るような奴ンナ、一人前の『インシャンナライン（漁師にはなれない）』『ヤビジアリヌ池間島ドー（八重干瀬があつての池間島だよ）』」

「カツオは不思議な生き物だよ。ついていれば船を追っかけてくるし、つきがないと全く見つけられない」。この言葉には、親方がカツオによって生活し、追っかけている中にカツオに対してある昔からの「神の魚」信仰が息づいている事が読み取れた。もちろん、その背骨となっているのは、海という世界に対する知的好奇心と愛情と信仰と叡智である。

島が自立的発展を展開するにあたって重要な事は、地域の自然生態系と文化様式を背景とした生活のあり方でないといけない。もし漁獲効率だけを追求するならば池間のカツオ・モノカルチャー化は進んだであろう。地域資源を守り、需要に応える持続発展的漁業であるために、毎年彼はカツオを追い続ける。

注1) 『プロヴィデンス号と八重干瀬』（プロヴィデンス号来航200年記念祭実行委員会,1997）

（けんもく・かずこ）

小禄治世さんとかつお節 沖縄県池間島民の南洋移民体験

宮内泰介

はだかもぐり

小禄治世おろくじせいさんは1908(明治41)年に池間で生まれた。1908(明治41)年というのは、池間島で商業的なカツオ漁、かつお節生産が始まった2年後である。ちょうど池間島のカツオ産業が急激な発展をとげる、その時代に小禄さんは少年時代を過ごした。

しかし、小学校を卒業した小禄さんが最初にやった仕事は、カツオ漁でもかつお節作りでもなかった。それは、貝採りと追い込み漁だった。

「わしは17歳から19歳まで素潜りをやった。潜って高瀬貝、広瀬貝、さざえとかを採っていた。冬に3~4名でくり船に乗って貝を採っていた。

追い込みもやった。追い込みの組合は池間島に2つあって、それはかつお節の組合とは別だった。2~3艘の船に12~13名が乗っていた。アオダイ(イラブチャー)が主だった。アオダイは少ないときには1斤15銭で売っていた。夕方売れ残りになったら今度は2斤15銭で売っていた。それでも売れ残ったら、乗組員に配当していた。若者たちには1人3銭とか5銭とかいった『お菓子代』が出た。おじいさんたちにはお酒が出された。夕方には酔っぱらっていたよ。配当は毎日あった。50~60銭だったかな。大漁したら1円何十銭とかだった。儲かったお金は全部お母さんにやっていた。

母さんの名は小禄かまどといった。母さんが20歳のときまで人頭税があったので、それまでは機織りをやっていた。うちの母さんは

何でもできた。9人も子供を養った」

1913(大正2)年ころに出された『宮古郡八重山郡漁業調査書』は、素潜りによる採貝漁業について、こんなふう書いている。「池間島漁業者の得意とする所、裸潜漁業にして能く二十尋内外の深底にも潜水し採介を為すが如きは殆ど他に比類を見ざる所にして彼の糸満人と雖も遠く及ばざるなり」。はだかもぐり(素潜り)といえは池間島民であり、それは、かの糸満漁民でも及ばなかった、というのである。カツオ漁業が本格化する前、つまり明治後半の池間島は、このくり船-はだかもぐりによる採貝漁業が中心であった。池間島でこんなに採貝漁業が盛んになるのは、明治期から大正期にかけて日本で急速に発展した貝ボタン工業が背景にある。

池間島の採貝漁業は、この貝ボタン工業へ原料を供給する漁業であり、つまりすでに商業漁業であった。このことは、1906年以降池間島でカツオ漁が産業として定着していく前触れとなっている。この時代、小禄さんは自分の身の振り方を悩んでいた。

「素潜りや追い込みは、もうかつてはいたが、なんだかこんな仕事でこの先生活できるだろうか、と思った。潜りもあまり達者じゃなかったし、毎日漁に出られるわけでないしね。

友人が床屋をやっている、『治世、床屋を習って、床屋をやらんか』と誘ってくれた。床屋をやったら1日70~80銭。当時1人20銭だったから、1日5人やったら1円。当時、夫婦だったら1日20~30銭で生活できた。そ



小祿治世さん

工場に入れ』というのでかつお節工場に入っ
た」

池間のかつお節工場

カツオ漁やかつお節製造に従事するというのは、当時の池間島民のライフコースとして確立したものだ。そこから外れようとした小祿さんは家族に反対され、結局のところ、かつお節工場の仕事を始めるわけである。好んでかしかたなくかはいろいろあっただろう、とにかくこの時期池間島に生まれたかぎり、カツオ産業と無縁に生きることは不可能だった。

「21歳のとき工場に入った。当時は皆組合1)だった。工場に入ったときの月給は5円だった。最初の2年間は、狩俣(2)から来た連中と一緒に、水運びや掃除など雑役をやった。3年目から工場を替わり、乾燥の係になった。乾燥室の竹の棚の上にかつお節を並べる。並べ方が難しい。下手な人がやると、かつお節が曲がっていくから。

薪は、工場に入ってから5年くらい松を使い、そのあと八重山からの石炭を使った。八重山からは大きな帆船で積んでいた。

26歳のとき、工場長がカツオ船の経営の方をしなければならなくなったので、わしが工場の面倒を見ることになった。そのときの月

のころ素潜りで魚を持ってきたら1斤15銭、売れ残りは2斤15銭。配当したら、一人当たりはいくらもなかった。

しかし床屋は家族に反対され、兄さんが『かつお節

給は33円に上がっていた。

戦前のかつお節工場は茅葺きだった。15~20坪の乾燥場と20坪の宿舍と倉庫があった。狩俣から来た人たちはこの宿舍に泊まっていた。

今と違うのは、当時は水がなかったことだ。船が釣ってくるのが1群だったらよかったが、2群、3群の場合はたいへんだ。大漁のときは午前6時ごろまでやるときもあった。いちばんやったときは、三日三晩寝ないでやった。あれが最高だった。もう飯食う力もなかった。3斤(=約2kg)痩せた」

- (1)組合制度については、本号の見目佳寿子の原稿を参照。
- (2)池間島の対岸にある、宮古島の集落。当時狩俣からは多くの労働者が池間島のかつお節工場に働きに来ていた。

池間島のカツオ産業は、沖縄県の奨励政策もあって、急速に発展し、大正期半ばにピークを迎える。このころ池間の漁民は町に繰り出してビールで足を洗うほどぜいたくをしていた、というウソかホントかわからない逸話は、今でも池間島で語り継がれている。しかし、小祿さんがかつお節工場に入った昭和初期は、すでに池間のカツオ産業が傾きはじめていた時期だった。慢性的な借金など、もともと脆弱だった産業構造に、昭和恐慌が襲いかかった。

南洋移民

小祿さんは、池間のかつお節工場で7~8年間働いたあと、これまたお決まりのように、ミクロネシア(当時の「南洋群島」)のトラック諸島(現チューク)へ赴く。1936(昭和11)年のことである。池間島から南洋群島へのかつお節移民が始まるのは、1931(昭和6)年であり、それより前の1929(昭和4)年には北ボルネオのシアミル島へのかつお節移民が始まっている。崩壊しかけた池間のかつお節産業を救う手

段としてとられたのが、移民だったのである。

多くの移民は、家族や親族に誘われて、という形をとった。小禄さんも、先に行っていたお兄さんに誘われてトラック諸島に渡っている。池間で磨いた腕で、トラックでもかつお節製造に従事した。

「トラック諸島の火曜島(1)で働いた。本土の人が経営するかつお節工場で兄さんと一緒に働いた。漁師はみな沖縄の人だったよ。所帯持ちで夫婦で来ている者は、夫が船に乗り、奥さんが工場でかつお節の削りの仕事をした。

トラックでのかつお節製造は、難しくなかったね。トラックでは、ものが腐らない。池間では 20 時間で腐る。トラックでは 30~40 時間刺し身で食べられる。どうしてもは分からないがねえ。トラックはそんなに暑くない。夜は毛布をかけないと眠れない。あそこは気候がいいねえ。あそこは冷蔵庫いらんよ。ほんとよ。かつお節を作るにはトラックは最高のところだよ。

漁によって配当が違った。兄さんの船はあまり漁はよくなかったねえ。しかし、大漁なら 1 年で 1,000 円くらいの配当があった。1 年間で 200 円くらい池間の家族に送金していた。

トラックの生活は楽だったね。買うものは何でもあった。池間にいたときは黒砂糖しかなかったけれど、トラックではざらめがいくらでもあったねえ。お米は本土からのものが売られていたよ。

夏島(2)に行くと料亭があって、一晩中飲み明かして、女を買って、遊ぶ者も多かった。わしはしなかったけれど」

(1)ファナパンゲス島。トラック諸島は多くの島からなり、それらを戦前の日本は月曜島、火曜島、…、春島、夏島、…と名づけた。

(2)トラック諸島の当時の中心地。現地名トノ

アス島。英語名デュブロン島

多くの池間島民の南洋経験には、そうした町体験があり、また、安定した生活の体験、そして現地の住民との接触の経験が含まれている。私は住民との接触がどうだったか関心があったので、池間の移民体験者に取材するときには必ずそれについて聞いた。わかったことは、個人差がかなりあるということだ。小禄さんの、

「水曜島(トル島)では、工場の庭に現地人(女や子ども)が遊びに来て、がやがややっているから、よく怒ったよ。船が入ってきたら、工場に揚げるのを現地人が手伝っていたね。子どもも来て加勢したねえ。その時は、ご飯を炊いて、魚なんかも山盛りして出したよ。現地人たちは、米を食べている者はいなかったと思う。パンの実を食べていたねえ。おいしいそうだったが、わしは食べたことない」

というのは、平均的な体験と言えるだろう。中にはまったく接しなかった人もいれば、逆に、現地の言葉もかなり覚えて深く接した人もいる。ポナベのかつお節工場で働いたある池間出身の女性は、「島民が工場にバナナなどを持ってきて、こちらのもので交換するときもあったが、とくに話をするとはなかった」と語る一方で、トラックで働いていたある池間の女性は、「島民はよく遊びに来ていた。親しくしている人は一人いた。彼女は、私に『日本に帰るの?』と言って泣いた」と語る。

戦争

トラックでの“豊かな生活”も、しかし長続きはしなかった。戦争である。

「戦争が激しくなってね、南洋庁のトラック

支庁に、寄付金みたいにお金を徴収された。1人あたりいくら買え、と来た。たびたび来て『買え、買わないと非国民だ』と言われるから、300円分の債権を買った。船も軍隊に徴用された。船の人間は徴用されたが、わしはされなかったので、金剛丸という船のかつお節工場で製造をした。このころのかつお節は全部軍が買い取っていた。かなりもうかった。しかし戦争が激しくなると、この船も軍に徴用されてしまった」

トラック諸島は、1943(昭和18)年から日本軍の連合艦隊の主要基地になり、急速に戦争への準備が進んだ。

その中で、沖縄からカツオ漁・かつお節製造でやってきた移民たちは、ある者は引き揚げ、ある者は現地召集された。自主的に引き揚げた者もいるが、政府による計画的な引き揚げもあった。政府によるもののうち、1944年2月17日に引き揚げようとした赤城丸^{あかぎ}には、数多くの民間人が乗っていたが(池間島出身者も何人も乗っていた)、米軍の空襲に会い、そのほとんどが亡くなった。このときの空襲はトラック大空襲と呼ばれ、赤城丸だけでなく、連合艦隊の艦船のほとんどが沈没し、夏島も甚大な被害を受けた。

小禄さんは、トラック大空襲の前、1943(昭和18)年に召集されている。

「わしも現地で召集され、柏4656部隊に所属した。空襲は毎日のようにあったが、アメリカは上陸しなかったのが、実際の戦闘はなかった。サイパンでのたいへんな戦闘をしたことが伝わっていたので、本土から来た兵隊は『次はトラックだ』と言っておったが、わしは『次は沖縄だろう』と言っていた」

1945年8月16日、1日遅れで小禄さんたち

は終戦を知る。同日召集解除され、上官に「地方に帰りたい人は帰ってよい。帰るところがない人は軍隊にいなさい」と言われた。小禄さんは水曜島へ向かう。

「水曜島へ行ったら、佐良浜()の連中が魚を捕って旅団司令部に納めていた。軍から爆弾をもらってきて、爆弾で魚を捕っていた。わしも彼らの組に入った。私は漁は下手だからご飯炊きをやった。6ヶ月間そこにおいて、金をもうけた」

() 沖縄県伊良部島の集落。本号の高橋そよの原稿を参照。

引き揚げは1946(昭和21)年2月だった。本土の人は先に軍艦で軍隊と一緒に引き揚げていた。沖縄出身者は最後の引き揚げだった。沖縄測候所の船でみんな一度に引き揚げた。沖縄の「インヌミ」()と呼ばれた収容所に1ヶ月収容されたあと、米軍の舟艇に乗せられて、池間に戻った。小禄さん39歳の春であった。

() 沖縄市(コザ)高原に当時あった、引揚者のための収容所。沖縄市企画部平和文化振興課編『インヌミから-50年目の証言』沖縄市、1995参照。

戦後、小禄さんは73歳まで池間のかつお節工場で働く。途中、かつお節を作り尖閣列島まで行ったこともある。60歳台も終わりになるころに、ソロモン諸島にも行った。やはりかつお節製造の仕事だった。73歳からは、「市役所に勤められて」地元で養蚕も手がけた。

小禄さんの話はまだまだ続く。今年で93歳の小禄さんの人生を、私はその抜群の記録力に驚きながら、聞いている。

いろいろなことをやったねえ。いろいろやったが、かつお節がいちばんだよ。

と小禄さんは笑う。

(みやうち・たいすけ)(北海道大学教員)

よしこオバアとコーヒー

缶詰女工として北ボルネオに渡った女性のライフヒストリー

高橋 そよ

よしこオバアの朝は、一杯のコーヒーからはじまる。今年、83歳になった。「コーヒーはね、豆が肝心。豆から挽く香りがいい」。甘党だが、コーヒーだけはブラックで飲む。オバアがはじめてコーヒーを口にしたのは、戦前の北ボルネオ・シアミル島ヘツナ缶詰女工として出稼ぎに行った時のことだった。

よしこオバアの生まれた伊良部島は、那覇から330キロ南下した宮古諸島のひとつである。島の北東に佐良浜^{さらはま}という集落がある。1970年代、この集落のカツオ漁は、沖縄県で第1の漁獲高を誇り、「カツオのシマ」とよばれた。60年代後半から、南洋カツオ漁に乗り出したアメリカや日本本土の企業は、佐良浜漁師の漁撈技術を高く評価し、船員として雇用してきた。南洋でのカツオ漁は、漁場に恵まれ、成功をおさめた。島はカツオ景気に沸き、茅葺屋根だった家はコンクリート建築に建て替えられた。島の風景は一変した。佐良浜にカツオ漁が導入されたのは、1909年だったといわれている。それまで、佐良浜の漁法は、モリツキや少人数の網漁が中心のモグリ漁だった。佐良浜では、カツオの活餌にムギヤとよばれる魚やタカサゴの幼魚を使う。モグリ漁の技術と知識は、佐良浜と平良市の間で群れるその幼魚を追い込み、獲るのに適していた。カツオ漁は、活餌が鍵となる。豊かな餌場と人材により、佐良浜のカツオ漁は大正の景気に乗って成功を収めた。しかし、1930年前後から、世界不況の影響が佐良浜のカツオ漁にも影を落とし始めた。ソテツ地獄とよばれる恐慌やカツオ船の借金が重なり、島の生活は苦しい

ものとなった。1936年、沖縄県政は、日本本土の水産企業と協定を結び、漁村救済のため、移民を南洋に送り込む打開策を打ち出した。漁師だけではなく、鰹節やツナ缶詰の生産女工として女性も海を渡った。よしこオバアは、北ボルネオに位置するシアミル島へ株式会社ボルネオ水産の缶詰女工として渡航した。

1933年、英領ボルネオ（現マレーシア・サバ州）にて、折田^{おりたいちじ}一二を中心にボルネオ水産が設立された。シアミル島に鰹節と缶詰の製造工場、バンギー島に缶詰工場を建設した。鰹節は日本本土向け、ツナ缶詰は北米向けに製造された。1936年に折田は沖縄県水産会へ呼びかけ、英領北ボルネオ移住漁業団を結成し、宮古地域からカツオ船と漁師を出漁させる。翌年には、女工が沖縄本島、池間島、伊良部島から募集された。よしこオバアは、1938年に第3期目の女工団として渡航した。20オの春だった。

1918年、よしこオバアは、4人兄弟の3女として生まれた。小学校の高等科を卒業すると、家の畑仕事を手伝った。しかし畑作だけでは、生活が苦しい。そこへ缶詰女工募集の知らせが島にまわってきた。人一倍強い好奇心がくすぐられた。島以外の生活を見たい。ボルネオの宗主国、イギリスの香りに触れてみたい。家計を助けたいという気持ち以上に、好奇心の方が勝っていたとオバアはこっそり告白する。「とにかく、やんちゃだったさあ」。海外へ出稼ぎに行くことを反対する母親の目を盗み、応募書類にパスポート用の写真をそえて斡旋者へ提出し

¹ 藤林泰, 2001, 「カツオと南進の海道をめぐって」『海のアジア・6』岩波書店

た。

1938年、16名の少女からなるボルネオ水産第3期沖縄女工団は島を発った。神戸港を出港し、釜山、キールン、マニラ、アムイ、サンダカンを寄港後、最終目的地タワオまでは約3ヶ月の船旅だった。船内には、いつも音楽が流れていた。レコードを前に少女たちは車座になり、流行歌を覚えた。食堂で、はじめてカレーライスを口にした。よしこオバアは、港に着くと真っ先に甲板に立ち、人や荷物の乗降を眺めていた。船の長旅は、見るもの全てが新鮮で飽くことがなかった。

キールンに入港したときの事だ。よしこオバアは度胸試しを計画した。甲板から海へ飛び込むことができるか、賭けをしようというのだ。船の縁に立つよしこオバアを客船中の人々は何事かとのぞきこんだ。オバアは、トンと船を蹴り、まっすぐに海へと吸い込まれた。小さな飛沫があがった。するとそれを眺めていた他の佐良浜の少女も、次々に嬌声をあげながら飛び込みはじめた。その姿を見て、客船からは歓声と笑い声があがったという。はしごを上り甲板に戻ると、みなが目目していることに気がついた。はずかしさで一杯になり、顔をあげられなかった。

神戸を発って3ヶ月が過ぎ、ボルネオ東部サンダカンに寄港したときのことだ。めざすタワオまで、あとひと航海あった。よしこオバアは、はじめて目にする熱帯の大地に立ち、その空気を体いっぱい吸い込みたかった。出港まで時間はある。パスポートを握りしめ、見学を申請し下船した。他の少女は臆し、サンダカンの町へ歩いていくよしこオバアを船から眺めていた。一番はじめに目に飛び込んだのは、寺の片隅に咲くハイビスカスのこぼれるような真紅だった。伊良部島では見たこともないほどに力強く、鮮やかな色だった。その花は、両手に乗せても余



よしこオバア

るほど大きかった。寺に手を合わせ、5つほど着物の袂に隠し入れた。船上にのこる友人にも見せてあげたい。花の重みで膨らむ袂を揺らしながら、船へと駆けた。

1938年7月、ボルネオ水産の事務所があるタワオに着いた。着くなり、女工16人全員は、折田一二所長室に並ばされ、そこで初めて契約書を見せられた。会社への服従と賃金について説明された。全員、緊張で体が強張った。その静寂を破るように、よしこオバアは女工の権利も認めるよう不服を申し立てた。その時、折田はぎょろりとオバアをにらみつけた。しかし、オバアは動じずに続けた。なぜ、日本本土からの女工と沖縄出身者に賃金格差があるのかと指摘し、この契約の場で判を押すことはできない、自分たちの働き振りを見てから賃金を決めるよう主張した。その時、それまで静かに椅子に座りことのなり行きをみていた折田は、サーベルを振り上げ激怒した。それは、まるで仁王のような形相だったという。よしこオバアをにらみつけ、「前に出てこい」と怒鳴り散らした。「お前の名前は覚えておく」とわら半紙と鉛筆を渡し、署名させた。識字力が試されていると思い、あえて紙いっぱい名前を書き、右手の親指で力強く捺印した。結局、事務所はオバアの提案を受け入れ、賃金は1ヶ月後に決められた。

8ヶ月が経ち、よしこオバアに工場敷地内の

診療所で看護婦として勤務するよう辞令がくだった。医師は、当時、西洋人が雇われていた。一度、日本人医師も配属されたが、心身症を病み一年も経たない間に日本本土へ引き揚げた。オバアは、診療所の近くに住む医師の幼い娘からマレー語を習った。医師とはマレー語を介した。オバアは、通訳としても診療所にとって必要な存在とどった。アルファベットを読むことのできるオバアは、薬名を頭文字で認識し、覚えた。病人は少なく、患者の多くは工場やカツオ船での怪我人だった。時々、隣の島の住民が薬とコーヒー豆を交換に来ることもあったという。

ある時、イギリス船が寄港した。ツナの缶詰を船員が積み込んでいる間、船長主催の水泳大会が浜辺で行われることになった。船長の競争相手に、キールンの一件で有名になったよしこオバアが選ばれた。船長の腕は、「水揚げされたばかりのマグロの背のように張り、胸板は正月のもち」のように厚かった。勝てるはずもない勝負だが、物怖じせず、懸命に泳ぐオバアを船長は見初めた。船長は、その夜の船上ダンスパーティーの相手にオバアを誘った。しかし、オバアは「恥ずかしくて、恥ずかしくて」断ったという。

娯楽といえば、1月1日と10月10日にシャールミル島の一番高い山にある金毘羅神社詣出が会社の行事としてあった。このときばかりは、女工は着物、男性はスーツ姿に正装した。夕方になると、男も女も同郷の者が船上にそろい、唄やご馳走、酒に酔いしれた。島唄は心地よく、穏やかな熱帯の夜風は、島を思い出させた。

1941年の冬、缶詰工場が全焼した。倉庫のすみから出火した火は瞬く間に工場を包み、よしこオバアはリーフの上を歩いて逃げた。炎は、まるで島を飲み込むかのような勢いだった。火勢が落ちついてから上陸してみると、工場から

離れた診療所は無事だった。しかし缶詰工場は稼働できない状態だった。全員がシアミル島からの撤収を余儀なくされた。女工の中には、会社との契約である三年満期が過ぎて日本へ帰る者、バンギー島の缶詰工場へ渡る者もいた。オバアは、満期は過ぎていたが診療所の待遇のよさからバンギー島へ渡ることを決意した。しかし、その年の暮れ、日本軍によってハワイ島の真珠湾が攻撃されると、島を取り巻く状況は変わった。連合軍によってバンギー島の日本人は全員集められ、パハラ島に收容される。收容所では、多くの人がマラリアに倒れた。食事は、3度与えられたが、米の匂いがあまりにもひどく、收容されている日本人女性が自主的に班を作り、飯炊き係りをかけてた。おかずには、魚の塩漬けを食べた。

日本軍が一時的に勝利をおさめると、翌1942年2月11日には收容所の人々は解放された。缶詰女工はバンギー島へ、よしこオバアはシアミル島の診療所へ戻った。シアミル島では、カツオ船も漁師も日本軍に徴集され、工場は封鎖されたままだった。ある日、聞いたことのない爆音がした。空を見上げると星のマークの飛行機が低空飛行をしている。米軍機だった。そのまま飛行機は浜へ墜落し、音をたてて燃え上がった。野次馬が、あっという間に飛行機を囲い込んだ。焼死したパイロットを棒で突つく者もいる。戦火はそこまで迫っていた。間もなく、全員、モステンへ引き揚げるよう命令が下された。

当時、モステンでは日本企業資本の麻農園が広がっていた。缶詰女工は、農園のすずめを追い払う小作人として雇われた。漁師の中には、自分で捕った魚を売り歩くものもいた。

その頃、よしこオバアは、見習い看護婦として産婆の仕事をしていた。往診はつらかった。広大で背よりも高い麻畑の中では、道を見失うこともあった。曲がり角にある麻に糸をくり

つけるなど印を残さなければ診療所へ戻ることができなかった。麻農園の移民者は、それぞれが遠く離れて住んでいるため、往診時にはジャングルを潜り抜けることもあった。

1945年8月15日、ラジオで終戦を知った。8月20日頃にアピー（現コタキナバル）収容所に収容され、日本へ引き揚げたのは翌年だった。アピーから広島経由で鹿児島に入るが、沖縄への引き揚げ船は1ヶ月待てどもなかった。列車で佐賀を経由し、名古屋へいった。復員をのせた沖縄行きの船がでるというわさを聞いたのだ。1947年9月、那覇経由で宮古の狩俣に着いた。佐良浜を発って、8年が過ぎていた。

佐良浜に戻ってからの生活についてよしこオバアは多くを語らない。ただ、看護婦の免許を持たずに、お産や病気に立ち会うことの責任がだんだん重くなり、那覇へ単身で渡ったという。職を転々とし、1982年、定年退職後、佐良浜に戻った。今は、姉と二人で暮らしている。姉の夫は、戦前、シアミル島へ漁師としてカツオ漁に従事していた。現地で軍に徴集され、そのまま帰らぬ人となった。

ボルネオに渡った頃の好奇心旺盛な性格は、80歳を越えた今も健在だ。めずらしいイカが手に入ったと言っては調理法を工夫してみたり、やけどに効くと聞けば「医者要らず」のアロエを庭先で栽培する。毎朝7時からのゲートボールは欠かしたことはなく、友人が病気になるれば見舞いにかけてくれる。「打てば響く人」よしこオバアは、まさにそのような人だ。衰えとは無縁の記憶力と頭の回転の速さで、約60年前に北ボルネオの缶詰工場でどんなことがあったのか、次から次へと語ってくれる。看護婦という仕事柄、会社の事務内容にも精通していた。「私は、北ボルネオの缶詰工場であったことは、会社のことも女工のこともすべて知っている」と自負するだけに、どのような質問をしようか、聞き

手側の「勉強量」が試される。オバアの生きてきた時間の背後にある、日本とアジアの関係をどれだけ知っているだろうか。オバアの前に座る度に、私はいつも己の勉強不足に身の縮む思いがする。まだまだ、オバアから学びたい事はいっぱいある。これからも、何度もオバアのところへ通うだろう。その度に、聞き手として、いい音で鐘を響かせるための言葉を磨きたいと思っている。

本稿は、「カツオと共に生きる島 沖縄県・伊良部島」（『オルタ』2001年8・9号）の一部を加筆、修正したものです。

（たかはし・そよ）（京都大学大学院）

カツオの町本部もとぶと南洋移民

荻堂盛實さん・具志堅用市さん・具志堅用権さんの話から

藤林泰・高橋そよ

1. 本部のカツオ漁とかつお節

本部でカツオ漁が本格化したのは1907（明治40）年ごろであり、その後急激に生産量を伸ばし、大正期には、沖縄を代表するカツオの村になった。

本部が成功を収めた理由として、第11徳用丸船長の具志堅用権さんは、（1）餌がすぐそばの珊瑚礁あるいは瀬底島の周辺でたくさん獲れた、（2）カツオ漁場が近かった、（3）天然の良港があった、という3つの条件を挙げる。

戦前、獲ってきたカツオは、そのほぼ全量がかつお節に加工して、那覇に売っていたという。また、煮たカツオの頭も商品として市場に売られていた。

一方、戦前の本部の家庭ではかつお節はあまり使われなかったという。煮干しがおもなダシの材料であった。かつお節は贅沢な食材であり、病人が妊婦しか口にすることができない貴重品であった。

当時、主食はイモで、特別の日（「折り目」）しか米は食べなかった。

昭和初期、本部にはカツオ船が40隻ほど操業していた。餌は、潜りではなく、4隻の小舟を操る4艘張の網で獲っていた。

漁期が半年なので、夏場は漁師をして冬場は畑仕事をしていた。畑ではおもに自家用のイモを栽培していた。

昭和初期ごろまで「スー八二」と呼ばれる竹製の散水器が使われていたが、その後、本部町塩川の漁師が発明した現在の形の散水器を使うようになった。

散水の目的は船と人の影を見せないためだ。餌をたくさん撒いても、散水器を止めたら食わなくなることからしても、餌に見せかけるための散水ということではない。

戦前の棹は長くて折れやすく、一匹一匹脇に抱えて針をはずしたりしていたので、釣り上げる数は、一人あたり現在の3分の1か4分の1程度であった。返しのない針を使って、釣り上げたまま甲板に放り出す方法「タタカー」は、南洋で本土の漁師から学んで持ち帰り、戦後普及したものだ。

船の形も戦前と戦後は異なっている。戦前は舳先が尖っていたが、戦後は台形に改良して舳先に座れる漁師の数を増やした。隆祥丸、宝洋丸は台形の船首だったが、蛭子丸は尖っていた。

2. 「南洋」の暮らし

（1）トラック諸島の日々：荻堂盛實さんおぎどうせいじつ

1920（大正9）年生まれの荻堂盛實さんは、小学校卒業後2年ほど本部で餌獲りをしていましたが、1937（昭和12）年、17歳でトラック諸島ルクノール島に渡る。すでに、トラック諸島では父と兄が働いていた。（『沖縄県農林水産行政史第17巻』によれば、トラック諸島では、昭和14年に17隻のカツオ漁船が操業していた）

沖縄からのカツオ漁船は、記憶にあるだけで、水曜島の、蛭子丸、富士丸、福栄丸、根剛丸2隻、木曜島の、大主丸、隆祥丸、豊洋丸、宝山丸、火曜島の、金剛丸2隻、白鷹丸、大進丸など、多数が操業をしていた。

ルクノール島では、第1根剛丸(約20トン)に乗り組み、船内の炊事「飯炊き」を担当した。炊事は新入りの仕事で、年下が入ってこないかぎりその仕事が続いた。

漂流事件

1938年暮れ、夏島(トラック諸島の当時の中心地)でエンジン修理を終えた後、正月用缶詰などの食料を積み込んで出港した。普段どおりに島伝いに進路を取るが、目印として見えるはずの島がいつまでも見えてこない。30分ほど見えてくる島が見えないため、「風が潮に流された」ことに気がつく。燃料保存のため、帆を張り「風任せ」とする。米は1俵あったため、お粥にして節約した。1週間くらい漂流し、見えてきた島影がヤップ島であった。(夏島から直線距離でおよそ1500kmである。)

島には水がないので、ヤシの実の汁で米を炊いたが、「甘くておいしかった」。

数日後の夕方、突然、南洋貿易所属の定期船伊達丸が入港してきた。追走するよう船長から指示され、無事トラック諸島の水曜島へ着き、さらに2、3日後、ようやくルクノール島に帰ることができた。突然雲の晴れ間から懐かしい夏島の大きな山の姿が見えた時の感動と安堵は忘れられない。3ヶ月あまりが経過していた。

その後、水曜島にあった蛭子丸のかつお節工場で働き、さらに1940(昭和15)年には、友人に誘われて木曜島の隆祥丸に移った。

蛭子丸で働いていた昭和14年ごろ、1年に1000円ちょっと稼いだ。沖縄ではその半分も稼

げなかった。

トラック諸島のカツオ漁

カツオ漁はほとんど日帰りであった。朝6時ごろから餌を獲り、その後漁に出かける。餌は「サネラー」と呼んでいたグルクンの稚魚で、トラック環礁内で獲っていた。

夏島の南興水産以外は氷がなかったので、釣ってきたカツオはその日のうちにすべて加工しなければ腐ってしまう。製造部門にいた荻堂さんは、大漁(毎日4トンぐらい)が続くと1週間も10日も1時間の仮眠で働き続けなければならない。これが、辛かった。

給料は配当で、たくさん造ればそれだけ手取りは増えたが、「だけど、あんまりこれが続くと、悪いけど今日はもう釣らないで帰ってくればいいのに」と思った。

製造は7名でやっていたが、忙しいときには島に住む日本人女性を臨時に雇うこともあった。

会社の場合水揚げ量に上限があったが、個人経営では無制限だった。

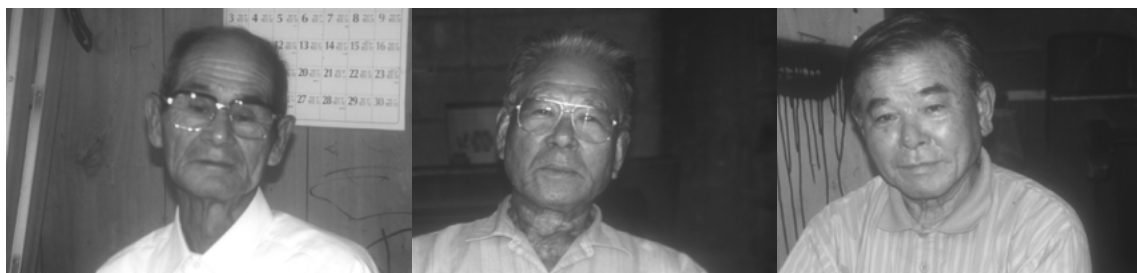
かつお節の販売は、沖縄人の親方が内地の問屋に売りさばっていた。戦前、かつお節は造れば造るほど売れた。

島の住民との交流

蛭子丸のころ、近所の島民がカツオの頭をもらいに來ていた。煮たり、焼いたりして食べていたようだ。みんな親切だった。

パンの実の採取、マングローブ伐採、草刈りなどの作業における彼らの分業は見事だった。

パンの実の調理についてもよく覚えている。



荻堂盛實さん

具志堅用市さん

具志堅用権さん

直径3尺、深さ3尺の穴にマングローブの薪を入れ、石を放り込んで焼いておき、そこにこぶし大に切ったパンの実を放り込み、上をバナナの葉や草で覆う。タロイモの葉で囲って水を流し込むと、焼けた石に熱せられて蒸気が立ち上がり、20分ほどで蒸し上がる。たまにごちそうになったが、ココナツミルクをつけて食べるととてもおいしかった。

軍需部での仕事

1941(昭和16)年ごろの約1年間、海軍第4艦隊軍需部に軍属として雇用されて食糧調達に従事した。そのころ、戦艦大和が寄港していたのを見たことがある。

軍需部(当時の部隊長は殿村大佐)が夏島にあったので、時々行ったことがある。夏島の向かいにある竹島では、山を半分削って飛行場と防空壕を建設していた。

応召のための帰国

1943(昭和18)年、徴兵検査を受けるために帰国した。現地採用の軍属であったので徴用延期も可能であったが、周囲の仲間が次々と招集されていくのを見て「良心的に」応召することを決めた。

(2) サイパン・パラオ・トラック諸島の暮らし

具志堅用市さん

具志堅用市さんは、1921(大正10)年生まれである。1936(昭和11)年まで乗っていた本部のカツオ漁船進用丸が、不漁続きのため解散した際、用市さんは「外国を見てみたい」という「野望」で、サイパンへ渡る。長兄と次兄がすでに10年ほど前から、パラオに渡航していた。辛かったサイパン

1937(昭和12)年、用市さんの乗った徳用丸は、本部の運天港からサイパンに向かって出港した。船には、本部からだけではなく、那覇や伊江島の人も乗り、船長は伊平屋島出身であっ

た。

「サイパンは、もういやだねえ」、と用市さんは述懐する。餌の「バカザコ」の群れを探るのが、今思い返しても辛い。陽も昇らない朝3、4時の暗い海に一人ずつ、300m間隔に下ろされ、群れがいる場所を船上の船長に知らせることが、若い乗組員の仕事であった。潜り漁をしたことのなかった用市さんは、その不得意さとサメへの恐怖、静寂した暗い海への畏れがあり、餌獲りの仕事がいやであったという。

2年後、パラオの兄から呼び寄せられて蒸気船でパラオに渡る。

パラオの南興水産

パラオでは、マラカル島の南興水産の工場で働いたが、ここは餌も豊富でどこよりも良い漁場であった。

「会社に売る魚よりも捨てる魚の方が多かったよ」。処理しきれなく死んだ魚が港いっぱいになり打ち上げられていた。沖に、ヤシの大きな葉が漂っていれば、その下に群がるカツオを狙う。カツオ船は20隻を下らなかった。サイパンとのいちばんの違いは、その餌の豊富さであった。

夜、網をリーフに掛けておくだけで、2、3日分を獲ることができ、生け簀を造るほどであった。出港する前には、生け簀の中を2人1組で泳ぎ、籠ですくい上げた。給料は、兄が管理し、正月と盆に実家へ送金していた。兄から配分される小遣い程度のお金で、防波堤先の氷屋で食べた氷が楽しみの一つであった。

島民について印象に残っているのは、ヤシ油で洗う髪の匂いだ。その匂いのきつさに近寄りなかった。

軍への食糧調達

軍に徴用され、パラオからトラック諸島へ移動して軍納用の魚を獲る。戦艦大和と船を並べたときのことが印象に残っている。

当時の漁船は焼玉のエンジンであり、停止することが難しく、少しでも大和に触れそうにな

るものなら、全員が港に一列に並ばされ、日本兵になぐられた。

鮮やかに記憶される日本兵の残虐さは、宮古出身者が日本兵と獲ってきたカツオとタバコを交換したことが上官にばれて、バットで殴られる制裁を受けた時だ。

「あの人は命もなかったと思うよ」

おかずを減らされることは日常茶飯事であった。そこで漁をする者の抵抗として、入港する前に離島に二人ほど下ろして、何本かのカツオを渡して待機させたことや、カツオの尻尾を紐で結わって船から吊して自分たちの食料としたこともある。

昭和19(1942)年のトラック空襲の時、爆撃にあった夏島にいたのだが、沈没した潜水艦があったことを、ロシア潜水艦の事故をテレビで見たとき思い出した。

空襲時、島の住民の被害は多くなかった。武蔵と大和が来なければあんな空襲もなかっただろう。

引き揚げ

トラック諸島夏島で終戦を迎え、直後アメリカの舟艇で沖縄に帰島した。崎浜秀吉さんと同じ船だった。内地に行くか直接沖縄に帰るかは希望で決められた。

本部に戻って、次兄が船長をする船に乗り組み、カツオ漁に従事した。

4. 現在のカツオ漁

具志堅用権さん(第11徳用丸船長)の話から

戦前から終戦後しばらく続いた大漁も、今は大幅に減少し、カツオ漁船もたった1隻になった。

現在、水揚げされたカツオは、鮮魚4割、かつお節6割の割合で処理されている。

本部のカツオ漁は現在、パヤオが設置されているところを漁場としている。沖縄のパヤオに

は、県が設置したもの＝「ニライ」＝のほか、水産庁、本部漁協が設置したものが(いちばん遠いところで100～110km)、それぞれ、県内の漁船(入漁料必要)、日本中の漁船(入漁料不要)、本部の漁船という入漁制限がある。5月上旬の大漁は、ニライ14号であった。水産庁のパヤオには宮崎船籍の船も来ている。

パヤオのなかった時代は、6月ごろはサメ付き群を追い、7月ごろから、ソネ(＝海底が盛り上がっている地形)付き群を追って大漁を得ていた。本部では5か所のソネが好漁場であった。深さ1000mほどの海底で急に盛り上がっているとところがあると環流が起こって魚が集まる。だが、パヤオができてから、ソネにまったく魚がつかなくなった。

ニライへの入漁料は、4基で年間10万円、沖永良部島(鹿児島県)のパヤオには年間20万円を支払う。

第11徳用丸の乗組員が一番若いのが45歳。3年前の平均年齢は、餌獲りが67歳、本船が63歳ぐらいであった。最年長は、トラック諸島出漁の経験を持つ崎浜秀吉さん81歳。

第11徳用丸には、16名が乗り組む(釣り手13名、船長、餌撒き、散水)ほか、餌獲りに16名、陸上勤務が1名、総勢33名が働いている。原則として餌獲りと一本釣りが入れ替わることはない。いずれも高齢化が懸念されるが、漁師には定年制がないので、高齢で元気な人がいる限り、後継者が入る余地がない。

経営的には困難だが、徳用丸がカツオ漁を止めることを周囲は許してくれないので、これからも続けていく。

(ふじばやし・やすし)(埼玉大学助手)

(たかはし・そよ)(京都大学大学院)

沖縄特集の資料編として、年表を作りました。本号では、池間島、伊良部島、本部町についてとりあげましたが、以下の年表は、そのうち、池間島および、戦前の移民先の南洋群島およびボルネオ（ボルネオ水産）に限った年表となりました。

戦前沖縄かつお節移民関連年表

	西暦	全国		沖縄		南洋群島		沖縄	池間島	南洋群島	ボルネオ水産
		鯉節	カツオ	鯉節	カツオ	鯉節	カツオ				
		生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)				
明治	33	1900	7,397	41,249		44			明治27年ごろからクリ舟(3~4人が乗る)にて八重山へ出漁し、主に裸潜りで採貝漁業に従事		
	34	1901	5,187	34,860		30		慶良間座間味村の松田和太郎が沖縄で初めてカツオ漁業を始める			
	35	1902	5,531	34,514		40					
	36	1903	5,041	26,921		47					
	37	1904	5,585	31,565		69					
	38	1905	9,527	41,943		163					
	39	1906	6,576	43,736		132		沖縄水産製造(株)、座間味にかつお節工場建設(沖縄初の水産加工工場)。	鹿児島の人、鮫島幸兵衛が鯉釣り漁業始める。		
	40	1907	6,103	33,041		293			池間漁民が共同出資で鮫島幸兵衛より漁船2隻購入		
	41	1908	7,134	50,102		819					
	42	1909	7,280	51,530		1,067		沖縄で初めて、石油発動機を付けた鯉船が建造	池間漁業組合創設。		
	43	1910	6,881	41,392		970		カツオ釣りおよびかつお節製造の教師16人を沖縄県が聘用し各所に派遣。	鯉釣り教師が県庁より派遣される。このころのカツオ漁船の年間最高漁獲高は1隻5万斤で、配当は1人35~40円で乗組員は20名程度		
	44	1911	8,101	49,470		1,536					
大正	1	1912	9,295	49,867		1,843			この年、池間島には5隻の帆船があった。		
	2	1913	7,880	42,283		1,934		沖縄鯉節委託商会設立	池間島の各組合が動力船を購入		
	3	1914	8,177	53,768		1,766					
	4	1915	11,729	101,750		7,714			池間には動力付き漁船6隻、各船ともそれぞれ鯉節工場をもち、組合組織で鯉節を製造。	沖縄から南洋群島への移住が始まる。	
	5	1916	7,783	60,917		3,623		沖縄県漁業組合連合会結成(鯉節を事業の柱とする連合組織)		南洋群島漁業規則制定	
	6	1917	9,117	82,802	722	3,968					
	7	1918	9,172	70,098	802	7,593					林謙吉郎、台湾総督府の援助でタワオに南洋開発組合を組織。漁業部(主任・折田一二=元台湾総督府副官海軍少佐)も設立し、同年末に曳縄漁業を開始。
	8	1919	8,637	64,396	689	5,467			このころ、池間島はかつお節景気に湧いていた。	トラック島の鯉漁業の先駆者玉城松栄(糸満出身)がトラックに渡航し雑魚漁を始める。	

	西暦	全国		沖縄		南洋群島		沖縄	池間島	南洋群島	ボルネオ水産
		鯉節	カツオ	鯉節	カツオ	鯉節	カツオ				
		生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)				
	9	1920	9,823	88,201	850	8,345					南洋開発組合、漁業部廃止。
	10	1921	10,590	81,614	983	6,702				南洋興発創立。	折田一二、南洋開発組合漁業部の曳縄漁業を引き継ぐ。
	11	1922	9,478	65,285	1,101	6,621	0	10		沖縄から南洋群島への移住が本格的に。南洋庁は、水産業奨励規則を設け、漁具漁船の設備に補助を始める。	
	12	1923	9,777	67,791	1,048	6,476		7		南洋庁は、漁業奨励金を始める。	折田の曳縄漁業中止。
	13	1924	9,029	68,282	1,088	5,594	1	18	池間島のカツオ漁船に始めて撒水器が備え付けられた。	南洋庁は、海參、鯉節その他の水産製造業に対し補助金を始める。	
	14	1925	9,351	69,541	953	4,870	2	36		玉城松栄が、トラックで鯉漁業を開始したが、うまく行かず。	
	15	1926	9,088	68,768	960	5,034	10	92		トラックで、玉城松栄が、南洋庁漁船費補助を得て「金剛丸」を建造	折田、ボルネオ水産公司設立。
昭和	2	1927	8,542	85,706	762	3,890	5	53	女子青年団がかつお節削り競技に参加。		ボルネオ水産公司、カツオ一本釣り漁業とかつお節製造を開始。タワオからシアミル島に漁業基地を移す。
	3	1928	9,287	76,989	882	4,652	19	164	沖縄県、大型船貸与政策を始める。	宝泉丸組合が、池間初の大型漁船戊辰丸(50トン。ディーゼル。県の貸与船)を経営	
	4	1929	8,837	72,137	662	3,289	104	470	沖縄県の総生産額5059万円のうち、水産業が393万円を占め、そのうちカツオ生産が114万円、かつお節生産が139万円を占める。	青年7名、技術者として北ボルネオへ派遣される。	南洋庁は、鯉節移出奨励金を始める。
	5	1930	6,731	68,793	662	3,735	283	1,336		このころ、不況の波が漁業界にも波及し、鯉節価格下落。組合は次々と解散へ。	
	6	1931	3,477	80,347		2,594	842	2,817	南洋群島への漁業移民が始まる。11月中旬、根剛丸(20トン)が33名と女工4名を乗せてトラック島へ出発。	漁場の狭隘化してきた焼津にて、南洋水産企業組合(焼津水産銀行の庵原市蔵が組合長に)が結成され、同年バラオへ進出へ。	
	7	1932	7,785	67,148		3,201	973	4,861			
	8	1933	8,120	77,309	570	3,110	1,305	6,889	小禄貞吉が最初の個人船、宝幸丸を建造し、カツオ漁業を経営。以降、個人船が続出。	南洋興発株式会社に水産部設立(責任者庵原市蔵)。	広島、愛媛、高知、沖縄などから36家族150余名がタワオへ到着(5日)。
	9	1934	9,528	84,917		3,939	1,594	8,956			沖縄県カツオ漁船の北ボルネオへの出漁始まる。シアミルにおけるカツオ・マグロ缶詰製造開始。
	10	1935	7,556	72,885		3,288	2,097	11,722		1月、南興水産株式会社創立。	共同漁業がボルネオ水産を買収。沖縄県に出漁団を組織。缶詰生産本格化。
	11	1936	10,114	101,035	774	3,906	2,423	14,266	瑞光丸、宝泉丸が北ボルネオに出航。(瑞光丸は南方出漁奨励の県助成により建造された船)。	南興水産、トラック、ボナベへ進出。	宮古漁船とボルネオ水産との契約出漁始める。

	西暦	全国		沖縄		南洋群島		沖縄	池間島	南洋群島	ボルネオ水産
		鯉節	カツオ	鯉節	カツオ	鯉節	カツオ				
		生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)	生産量 (トン)				
12	1937	9,566	105,909	473	3,194	5,813	34,061			南洋群島のカツオ漁業はピークに至り、南洋節が日本内地にいちじるしく移入され、かつお節は大きく値崩れした。沖縄出身の個人経営者は大打撃を受ける	
13	1938	7,768	120,818		3,234	2,501	14,959			このころから、南興水産による統合へ。	バンギー島に缶詰および製氷工場を建設開始。
14	1939	9,789	100,522	586	3,304	3,230	19,019			トラックのカツオ漁船の過半数が南興水産の傘下に。	バンギー島の缶詰および製氷工場完成。直営の漁船12隻、従業員357人、出漁団5隻、従業員86人。
15	1940	10,011	116,349		4,209						
16	1941		91,629		4,194					12月8日の太平洋戦争勃発にともない、各地の南興水産の施設は軍に徴用され、また漁獲物は軍への納入が優先された。	シアマイル島の缶詰工場焼失。12月8日、太平洋戦争突入。12月10日、北ボルネオ政庁の役人が来て、シアマイル島の全島民をサンダカンに収容へ。
17	1942		79,715		3,294					海軍がラパウルに基地を設置するに伴い、軍への生産食糧供給のため、南興水産はキャビアンに事業基地を作る。	
18	1943		51,691		2,318						
19	1944		39,642							2月17～18日、トラック大空襲。2月17日、民間人引き揚げのための最後の船、赤城丸が撃沈、565名の犠牲者。	バンギー島での漁業活動停止。11月、シアマイル島、連合軍により空襲。それを機に、ボルネオ水産の活動停止。シアマイル島の人間たちを、モステン農園に避難させる。
20	1945		19,653								のちに「サンダカンの死の行進」と呼ばれる転進命令下命、サンダカン周辺の各部隊はジャングルへ。

【資料】

庵原市蔵, 1940, 『南洋漁業の使命と将来』, 『南洋水産』6(9):2-7 / 上田不二夫, 1983, 『近代沖縄鯉節漁業史と渡名喜』, 『渡名喜村史』渡名喜村 / 上田不二夫, 1989, 『水産業』, 『座間味村史・上巻』座間味村, pp.437-563 / 沖縄県農林水産行政史編集委員会, 1983, 『沖縄県農林水産行政史第17巻水産業資料編』, 『農林統計協会 / 片岡千賀之, 1991, 『南洋の日本人漁業』同文館 / 川上善九郎, 1994, 『南興水産の足跡』, 南水会 / 農林水産省統計情報部『水産業累年統計・第2巻・生産統計・流通統計』 / 農林水産省統計情報部『水産業累年統計・第3巻・都道府県別統計』 / 松本國雄, 1981, 『シアマイル島: 北ボルネオ移民史』恒文社 / 森田真弘, 1961, 『仲間屋真小伝(池間島漁業略史)』 / 渡邊東雄, 1932, 『南方水産業』, 中興館 などより作成

【作成】宮内泰介

編集後記

カツカツ研を始めて早5年が経ち、まとめの時期になりました。来年コムズ社から『北上するカツオ、南進する人びと』(仮題)を刊行すべく、研究会メンバー一同、原稿を執筆中です。ご期待ください。なお、今号に関係あるものとして、藤林泰, 2001, 『カツオと日本人・9・祖父は沖縄のカツオ漁師』『月刊オルタ』2001年6月号 / 藤林泰, 2001, 『カツオと南進の海道をめぐって』, 尾本恵一他編『海のアジア・6・アジアの海と日本人』, 岩波書店 / 高橋そよ『カツオと共に生きる島——沖縄、伊良部島』『月刊オルタ』2001年8・9月号 / 見目佳寿子『鯉節は島の宝だよ』『月刊オルタ』2001年10月号(『月刊オルタ』はアジア太平洋資料センター tel:03-5209-3455 発行です)があります。あわせてご覧ください。(宮内泰介)